

# こども環境学会 第3回 合同セミナー「子どもの育ちと自然環境」

## 報告書

### 1. 大会概要

日時：2014年9月20日（土）・21日（日）

会場：国立大学法人名古屋工業大学

主催：こども環境学会第3回合同セミナー開催委員会

後援：国立大学法人名古屋工業大学

参加者数：一般60名、学生10名、学生スタッフ15名

### 2. エクスカーション ～相山女学園大学 附属幼稚園見学～

環境デザイン研究所の中川由美子氏のご案内のもと、見学ツアーが進められた。参加者数は35名で、学生の参加が特に多かった。施設の内部には広場があり、ネットやロフト等の遊具などが設けられていた。室内は木材が多く用いられ、温かみのあるデザインであった。



### 3. 基調講演 テーマ「幼少期の原風景“記憶”」

桑原淳司氏（日本大学芸術学部・教授）より、「あなたはどんな遊びの記憶を持っていますか？あなたはどんなところで遊んでいましたか？あなたにとって原風景となる

素敵な場所がありますか？」という問いかけから始まった。原風景の人、物、事、環境はどれ一つ欠ける事のない五感体験で人が育つ上で重要な要素である。その原風景が大人になって活かされる事、これからの子ども達が育つために子どもに必要な環境として次の5項目をあげられた。①持っていて

欲しい物：スケッチブック・デジカメ・虫めがね、②使

って欲しい物：竹・和紙・ヒノキ材・ナイフ・のこぎり・ハサミ、③して欲しい事：あらゆる場所での五感体験遊び、④子どもと一緒にいて欲しい人：老若男女を問わず遊びの達人、⑤大人たちに作って欲しい場所：物・事・人のすべてが上質な環境。これらの物・事・人・環境が相互に作用しながらがむしゃらに遊びこむ事によって大人になり社会に出てその経験やセンスが活かされていくと述べられていた。

### 4. 研究発表・活動報告

研究発表については、「こどもの環境・行動Ⅰ」、「こどもの環境・行動Ⅱ」、「こどもの教育・学習」、「こどもの遊び・デザイン」の4セッションにわかれ、15編の発表があった。また、活動報告については、「こどもの遊び行為」、「こどもの遊び環境」という2セッションで7編の発表があった。会場からは多くの質問があり、それぞれ活発な議論がなされていた。



### 5. 懇親会 報告

名古屋工業大学内のcafé salaにて懇親会が行われた。会場の周辺は、名古屋工業大学・石松丈佳研究室による光の道が施され、懇親会をより華やかなものとした。参加者は44名であった。名古屋女子大学・宇野民幸氏による数学ゲーム、富山大学・早川隆志氏による皿まわし、名古屋工業大学・石松丈佳氏によるコマまわし、名古屋工業大学・石松研究室による小演奏などのイベントがあり、たいへんな盛り上がりを見せた。



## 6. シンポジウム テーマ「子育てにおける自然の意義と役割 ～野育・木育・森育～」



業高等専門学校)から「子育てとは何か?」という問いかけがあり、久保田浩氏の日常生活・中心となる活動・系統的に積み上げる活動という三層構造に触れながら、各層での子どものセンスオブワンダーを引き出す「自然」の役割について考えるという、本シンポジウムの趣旨について説明があった。

はじめに、松井勲尚氏(岐阜県立森林文化アカデミー・教授)より、「木育」実践に至るまでの山村でのご自身の生活経緯等の紹介のあと、日本は世界で最も森に囲まれた国であり、木の文化がある。木と触れ合い、木に学び、木と生きるということを教育として明確化し、子どもたちに伝えていく必要性を感じているとのことであった。そこで、木育カリキュラムを開発し、実践する中で木と樹のつながり、自然を感じる力、モノを大切に作る心、命を大切に作る心などが育まれる様子が、子どもだけでなく、保育士や親にまでみられた。木でモノ作る事を通して「自然は人の思い通りにはならない」ということを実感して欲しい、森林を大切に作る気持ちとともに、自然の脅威を知る事も「生きる力を育む」ことだと考えていると述べられた。

次に、伊藤栄一氏(NPO 法人森のなりわい研究所・代表)からは、岐阜県で取り組まれている「木育」という大きな枠組みの中での「森育」の実践について紹介があった。岐阜県は産業と生活を両立させている数少ない県であり、伊藤氏は育ちの場としての森林、環境教育の中で「森」を捉えている。また、森には多様な生物の集団があり、そこでの生物の相互関係から社会の仕組みを理解できるのではないかと考える。「森育」では、子どもたちが森を感じながら、色々なものに出会い、相互のつながり、空間的なつながりを理解しながら、森に育まれる暮らしを見直して欲しいと考えている。「森育」を通して、人格形成とともに、賢明な消費者・地球人としての自覚を促していきたいと述べられた。

最後に、木村歩美氏(NPO 法人園庭・園外での野育を推進する会)からは、野育の紹介があった。野で育つ機会が減っている子どもたちに、地球を五感で感じて育っていく必要性を感じているとのことであった。木村氏が実践されていた「アート書道」の活動の中で、何気ない体験、微妙な感覚を意識する身体の動き、本能のままにやりたいことをやり遂げる体験を、多くの子どもたちが経験していないという状況が紹介された。「野育」では、園庭がツールになると考えており、狭くても重層化・立体化し、かつては自然に行っていた体験を、発達段階でも必要であると捉え、保証していきたいと考えている。保育者が管理者ではなく、人生の先輩として自分が楽しんでる姿・背中を見せながら、地域を巻き込んでいきたいという考えを持っていることについて、実践例の多くの写真とともにご紹介された。

3人のパネリストからの話題提供の後、ディスカッションが行われた。司会より各パネリストに対し、「子どもへどのように関わっていくべきか?大人の関わり方・役割についてどのように考えるか?」という質問が投げかけられた。「野育」では、自然と子どもをつなげる、あるいはその道の専門家と子どもをつなげるファシリテーターとしての保育士への期待、「森育」では身近な場からの発見を促す、共感的他者としての大人として期待する所が述べられた。「木育」では、道具の使い方をはじめ、文化そのものを伝えるべき大人の義務にまで言及された。

## 7. エクスカーション ～犬山散策～

雨の心配があったが、散策日和の快晴に恵まれた。参加者数は25名であった。はじめに、昼食をとりながらの鶴飼見学で、鶴匠と鶴の息の合ったパフォーマンスに、参加者一同歓喜の声をあげていた。その後、如庵、犬山城の見学を行い、本セミナーを締めくくった。

